



【朝さろん】 82nd morning

『夜と霧』 ヴィクトール・E・フランクル

2018年7月8日(日)@渋谷
参加者:14名、芹沢(主催)、大山(進行)

朝さろんでは**参加者全員**で、

- 1、作品を通り一遍の理解から解放します。できるだけわかった気にならず、どこまでも“わからない”という感覚をたいせつにしなが、ていねいに自分の考えと向き合うために対話する、協働的な営みです。
- 2、リラックスして《問い》に向き合しましょう。じっくりと問いへの理解を深め、問いの前提となっていることから本質について、自分の言葉で確認することを第一にしています。
- 3、自分と他者との見解の違いが際立つことを歓迎しましょう。お互いの差異を承認し、その前提に立って共に探究しましょう。

そのため、以下の**心がまえ**をご確認ください。

- a) 話すことよりも、考えることが目的です！だからゆっくりと話しましょう。
- b) 言っていることが分からなければ、質問をして理解に努めましょう。質問大歓迎！
- c) 聞いているだけでもOK、沈黙もOK。だけど、考えることは諦めない。
- d) 話している人の話を最後まで聞く！みんなが安心して話せる場を作りましょう。
- e) ほかの人を傷つける発言でなければ、どんなことでも自由に話してOK。
- f) 意見は大事だけど、同じくらい、質問をすることが大事です。
- g) 意見の批判は◎、相手の人格を攻撃することは× ここをきっちりわけましょう
意見(発言)はあくまで問いを深めるための“目印し”。人格批判ではありません。

『正論(意見)ってのはあくまでも自分っていう潜水艦の周囲の状況を確認するために発信するソナーなんだよ。自分が正しいと感じる、信じる意見をポーンと打って、返ってくる反響で地形を調べるのだ。ソナーで道が拓けるわけじゃない。』(舞城王太郎(2009)「ピッチマグネット」より)

このような心がまえで臨むと、**副次的なものとして**こんな態度が身につくかもしれません

- 自分の考えが変わるということを、体験を通じて受け入れることができる
(自己変容の可能性)
- 間違ってもいいんだという体験を、安心安全な場所で得ることができる
(可謬性の獲得)
- 他者の気持ちや視点に立って考えを組み立てることができる
(立場の入れ替え、他者への想像的な同一化)
- 問いを深める思考力を養うことができる
(探求能力の涵養)
- ひとりではなく集団での対話や議論に協調できる
(共通了解志向型の態度の獲得)



【推薦のことば】 推薦者: 大山さん

納得しがたい境遇に甘んじているとき、私は、本書にかいてあるような「今に見ている、わたしの真価を発揮できる時がくる(p122)」という心境になっていることが、よくあります。それは、「期待」にすがって苦しい日々をやりすごし、「現実をまるごと無価値なものに貶めること(p121)」、「目下の自分のありようを真摯に受けとめず、これは非本来的ななにかなのだと高をくく(p121)」る、というありようにほかなりません。そのことを、私は、著者からきびしく指摘されたこと、この本をよんで感じています。

本書では、こうしたありようを「暫定的存在(p118)」といい、とくに強制収容所においては「典型的な収容所心理(p111)」であったとされ、主体性や感情ならびに節操といった人間性を失わせていった、といえます。

それは、毎日殴られるというおぞましい現実について、「被収容者の心をとっさに囲う、なくてはならない盾(p37)」だったといいますが、こうした「典型的な収容所心理」に入り込んで心を閉ざし、なんとか収容所の日々をやり過ごしていても、やがては完全に精神が破綻する多くの被収容者を、著者はまのあたりしてきました。

著者はこうした過酷な状況下で、「生き延びる見込みなど皆無のときにわたしたちを絶望から踏みとどまらせる、唯一の考え(p131)」として、「わたしたちが生きることからなにを期待するかではなく、むしろひたすら、生きることがわたしたちからなにを期待しているか(p129)」を問い直すこと、そして、誰も身代われない自分に与えられた苦しみをとことん苦しみつくすこと、これらが不可欠であると悟りました。

この力強い言葉のみならず、この考えに至るまでに引用される哲学者の言葉も魅力的であり、私は、今回それらについてみなさんと議論してみたいとおもい、推薦させていただきました。

【問い】 (ご発言は必須ではありません)

1、(感想) 感想をお一人ずつお伺いし、一周してから、皆さんがお話して下さったご感想について、自由に意見交換したいと思います。

2、話の流れしだい、下記の問いについて、意見交換できれば、と思います。

2-1)

「強制収容所での生のような、仕事に真価を発揮する機会も、体験に値すべきことを体験する機会も皆無の生にも、意味はある(p112)」とありますが、ここでいう「意味」とは、どのようなものなのでしょうか？

2-2)

P134には、未来に彼らをまっける何か(まちわびている仕事や子供)がある人は、どんなことにも耐えられる、とある一方、P118では、解放までの期限が、どこまでも無制限に引き延ばされるという状況下では、人は、未来をみすえて生きることができず、精神の崩壊現象がはじまる、とあります。

この2つは、矛盾しているように思われますが、どう解釈したらよいのでしょうか？

2-3)

(生存率5%と見積られる中で、)「ありがたいことに未来は未定である(P137)」とあり、そのことを、著者は希望をもつよりどころとしていますが、一方で、「偶然の僥倖に左右される生はもともと生きるに値しない(P113)」、ともあります。この2つは、一見矛盾しているように思われますが、どう解釈したらよいのでしょうか？

3、その他の問い

3-1)

本書において、「苦しみ」と「自由」はどのような関係になっているのでしょうか？

3-2)

これといった価値のないことを無意味というように、そもそも「意味」には「価値」という意味が含まれていますが、にもかかわらず、本書では、「強制収容所での生のような、仕事に真価を発揮する機会も、体験に値すべきことを体験する機会も皆無の生にも、＜意味＞はある(p112)」とあります。ここでいう＜意味＞とは、どういうものなのでしょうか？

3-3)

ニーチェの言葉：「なぜ生きるかを知っている者は、どのように生きることに耐える(p128)」とは、どういうことでしょうか？

3-4)

ドストエフスキーの言葉：「わたしが恐れるのはただひとつ、わたしがわたしの苦悩に値しない人間になることだ(p112)」とは、どういうことでしょうか？

【テーマ】〈本棚拝見(リクエスト特集)〉

ふだみなさんはどのような本を読まれているでしょう。あるいは、過去にどんな面白くて、記憶に残る、大切な1冊をお持ちでしょうか。

不定期で開催している「リクエストシーズン」も今回で4回目です。毎シーズン、みなさんの個性的でユニークな選書と、それ以上に濃密な選書理由や対話の時間を提供していただいています。数ある朝さろんの開催回のなかでも、このリクエストシーズンがいちばん印象に残ってる、という方も大勢いらっしゃいます。今回のリクエストシーズンでは、いつもより長く期間を取って、より幅広い選書やそこでの対話の広がりを観察してみたいと思います。朝さろんとしては各回が、推薦者さんとの真剣なコラボレーションという形になります。

推薦書の魅力をきちんと紹介するのはもちろん、推薦者だからこそその「お題」や進行なんかも出しているだけながら、そこに一定の朝さろんらしさもマッチングできればと思っています。本への熱烈な愛情だけでなく、参加者全員でその魅力を味わい、深いところで受け止められたらと思います。推薦者さんの個性とあいまって、各回ごとにきらきらと印象を変えていく「リクエストシーズン」、ごゆっくりご堪能ください。

【本】

『夜と霧』 ヴィクトール・E・フランクル

初刊：『…trotzdem Ja zum Leben sagen:Ein Psychologe erlebt das Konzentrationslager』1946年

単行本：『夜と霧：ドイツ強制収容所の体験記録』霜山徳爾訳（みすず書房、1956年）

『夜と霧 新版』池田香代子訳（みすず書房、2002年）



朝さろん 82nd morning
〈本棚拝見(リクエスト特集)〉
『夜と霧』 ヴィクトール・E・フランクル

【ヴィクトール・エミール・フランクル (ぶいくとーる えみーる ふうらんくる)】

Viktor Emil Frankl、1905年3月26日 - 1997年9月2日)は、オーストリアの精神科医、心理学者。著作は多数あり日本語訳も多く重版されており、特に『夜と霧』で知られる。

1933年から、ウィーンのリヒター精神病院で女性の自殺患者部門の責任者を務めていたが、ナチスによる1938年のドイツのオーストリア併合で、ユダヤ人がドイツ人を治療することが禁じられ、任を解かれた。1941年12月に結婚したが、その9ヶ月後に家族と共に強制収容所のテレージエンシュタットに収容され、父はここで死亡し、母と妻は別の収容所に移されて死亡した。フランクルは1944年10月にアウシュビッツに送られたが、3日後にテュルクハイムに移送され、1945年4月にアメリカ軍により解放された。その後1946年にウィーンのリヒター精神病院に呼ばれ、1971年まで勤務した。1947年に再婚している。

ナチス強制収容所での体験を元に著した『夜と霧』は、日本語を含め17カ国語に翻訳され、60年以上にわたって読み継がれている。

よく誤解されるが、フランクルのロゴセラピーは収容所体験を基に考え出されたものではなく、収容される時点ですでにその理論はほぼ完成されており、はからずも収容所体験が理論の正当性を検証することとなった。

極限的な体験を経て生き残った人であるが、ユーモアとウィットを愛する快活な人柄であった。学会出席関連などでたびたび日本にも訪れていた。

【 内容 】

1946年に出版されたヴィクトール・フランクルのナチスの強制収容所経験に基づいた書籍作品。原文のドイツ語タイトルは日本語訳すると『それでも人生に然りと言うある心理学者、強制収容所を体験する』となる。

1956年に刊行された日本語題の『夜と霧』は、1941年の「夜と霧」(法律)に由来する。アーノルド・ワイス=リューテルの書籍(1952年)やアラン・レネの映画(1955年)の題名とされていることを認識したうえで名づけられた。

1959年に刊行された英語版では当初『From Death-Camp to Existentialism』(死のキャンプから実存主義へ)という題名が付けられたが、1962年に『Man's Search For Meaning』(生きる意味を探す)という題名に付け替えられた[2]。フランス語版もこの英語版の題名がベースになっている。

多くの原文改訂が行われた新版が出版された事で、若者世代向けに、2002年(平成14年)に新訳版(写真による解説無し)が発行された。従来の霜山徳爾による翻訳版も発売中である。

今後のラインナップ / テーマ 〈本棚拝見(リクエスト特集)〉

- ▼#83 8/5(日) 大澤さん 『芋虫』 江戸川乱歩 (新潮文庫「江戸川乱歩傑作選」所収)
- ▼#84 9/9(日) たけはなさん 『植物図鑑』 有川浩 (幻冬舎文庫)
- ▼#85 10/14(日) 堀越さん 『君の脾臓をたべたい』 住野よる (双葉文庫)
- ▼#86 11/11(日) 楠本さん 『神様のいない日本シリーズ』 田中慎弥 (文春文庫)

【原則、毎月第2日曜のAMに開催】

「夜と霧」読書会感想：大山さん

本稿は、7/8 に開催された朝さろんリクエストシーズンにおいて、V・E・フランクル『夜と霧』(みすず書房)を推薦&進行を担当頂いた大山さんが、メールニュース用にご寄稿下さいました。

当日の参加者は14名。改めてご参加頂いた方々に御礼申し上げます。

私は、かねがね、著者のことを俯瞰してそれを本の解釈につなげてしてしまうのは、リスペクトに欠けるし、安易な解釈にも陥りがちになるのでは、と勝手に思っていましたが、「夜と霧」といった、著者自身のことも記されている本であれば、テキストに則して、著者のにじみでているありようを推測するのは、むしろ、さらなる理解への心構えをかきたてるかもしれないと、今回、参加者のご意見から学ばせていただきました。

そのご意見とは、著者自身が収容所を生き延びている一方で、「いい人は帰ってこなかった(p5)」と、最初に前置きしていることに端を発した、次のようなものである。

運命をうけとめ犠牲になっていった「いい人」たちを手本とし、人はどうあるべきか、を述べた道義的な語り口は、随所で感じられる著者の生き延びるためのしたたかさとは、あまりしっくりせず、「矛盾」しているようにさえ見える……。

このご意見は、今回ご質問として挙げた、「未来」に自分をまわびている子どもや仕事があることを知ることが破綻しない唯一の道であるとしながらも、それをなぜ「トリック(p123)」などという狡猾さにおわせる表現にしている箇所があるのか？という疑問にも繋がる。

「存在が困難を極める現在にあって、人は何度となく未来を見ずえることに逃げ込んだ(p123)」ともあるように、「未来」を信じることは、思考テクニクを弄しての苦しい現在からの逃避とも読めるが、そのことは、自分に与えられた苦しみを苦しみ尽くした犠牲者のありように著者が感銘をうけ手本としたことと「矛盾」しているように、ここでも思われるのである。

この他にも腑に落ちない表現があるなかで、もうひとつ今回焦点になったのは「強制収容所での生のよさ、仕事に真価を発揮する機会も、体験に値すべきことを体験する機会も皆無の生にも、意味はある(p112)」の「意味」とは何か、という点である。これといった価値のないことを無意味というように、「意味」には「価値」という意味が含まれるが、上述の生にどういう「価値」(＝「意味」)がありうるのだろうか？…私には想像が付きませんでした。

今回、参加者の一人が、別の著書を引用し、「運命を受けとめる態度」によって実現される「価値」がある、という考えに基づいた「態度価値」というフランクルが提唱した概念を挙げてくださり、上述の「意味」とはこのことを言う、という解説をして下さった。

そのおかげで議論がさらに活性化し、私も、次のような問いが浮かびました。……たしかに、著者が出会った、余命いくばくもない病棟の若い女性のように、その運命を受け止めるさまを、他者によってまのあたりにされていれば、その他者が、この女性のありように感動をおこさせてくれるといった価値を認めてくれるかもしれない。だけど、例えば、誰からも冤罪だと知られていない一人の冤罪死刑囚が、人知れず

その不条理な運命を受け止めて死んでいったとしても、その正確なありようは誰も知りようがないが、こうした場合は、どうなるのであろうか。

このとき、たとえ当人に深い満足が生じようとも、そのありようが誰にも知られず、したがってそれがほんとうに価値あることなのか否か客観的に検証されないとすれば、自己満足の域を越えず、「価値」があるとは言えなくなりはないか？(誰にも知ってもらえず、たったひとりで不条理な運命を受けとめる場合は、その態度に意味などありません……というのなら、「運命を受けとめる態度」そのものに価値がある、とはいえなくなる。と同時に「態度価値」という概念性も無効になってしまうのではないだろうか。)

むろん、こうした疑問は的外れかもしれないが、他にも本書における著者の考えには、(私にとっては)「矛盾」しているとおもわれる箇所があり、安易な納得を拒んでるかのように見える。

あるいは、参加者の一人がおっしゃったように、過酷な状況を人間が生き延びるのは「矛盾」なしにはありえない、ということ、本書全体は示唆しているのかもしれないが、私は、この「矛盾」として見える、にじみでている著者のありようと私のありようの間にひそむ大きな溝に、さらに居住まいを正して臨む必要があると感じました。

「文庫本の解説、のような添え書き」

文庫本ってたいい、解説かあとがきがついてますよね。第三者に原稿料を払って解説を書いてもらう。単行本にはついてない解説が魅力で「文庫派」という人もいます。安く仕上げる場合は著者があとがきを付してたりもしますが、あるいは「絶対つけてくれるな」という単行本そのまま派も。著者の嗜好や交友関係なんかも伺えて文庫には独特の楽しみがあります。そんな文庫のように、ご担当頂いたことの感謝を込めて、添え書きを寄せてみます。

筆者(大山氏、以下同)は『夜と霧』の読書会を進行されたことで、やってみる前には思いもしなかったような「問い」が自分の胸の内に残ったようです。その「問い」を、主として本書の理解をめぐる「矛盾」として自覚されています。矛盾。二つの事柄が丸きり正反対のことを指していて、どちらを選んだらよいのか判断の根拠が不透明な状態。この膠着した状態で、筆者は粘り強く、じっくりと、読書会での対話を反芻し、再検証を加えています。

ここでは「なにが真か(正解)」を探るまなざしと、「自分が納得するのはどんな解か(納得解)」を探るまなざしとか共存しています、ご承知のとおり、正解と納得解とは、同じでないことが珍しくありません(行動原理により深く根差すのは納得解の方だったりします)。筆者はこの両者をできるだけ峻別し、それぞれを見極めようと目を凝らしているのですが、実は正解と納得解のような“ねじれ”が、大元の『夜と霧』の中にもある“つばい”というのがそもそもの発端になっています。

作家の伝記的事実や発言をそのまま無批判に作品の読解に持ち込む(≒作家論的)態度を、筆者は冒頭で嫌っています。そうではなく、書かれた内容に添ってじっくりと向き合うこと(≒作品論的。より原理的な徹底を図るとテキスト論に寄って行く)を大事にしています。しかし筆者は、『夜と霧』はフィクションで

はなく歴史的な事実とその考察を描いた本なので、作者フランクルの体験的な事象も加味しながら、書き手＝体験者の存在を踏まえて読むことの方が自然で、その方が適切な理解につながるのではないかスタンスを修正して本書に臨んでいます。

でも筆者がみんなでじっくりと本書を読みこんでみたところ、「ん？」と疑問を感じる表現に行き当たります。この疑問はつまるところ、収容所の人々を冷徹に症例観察し、その結果を一種の研究成果としてまとめた本書という「事後的」かつ「精神科医」としての様態と、自らも深刻な状況の中で生き延びる為にさまざまなことをしたという「渦中」かつ「同じ体験者」としての様態との裂け目から生じた摩擦です。本書がアウシュビッツ生存者による単なる「手記」であつたら、これほど広範な読者を得ることはなかったでしょう。

本書は体験記でありながらも、その根底において心理学者としての著述が優先されています。だから作中でフランクルは、自分自身の中にある「生身の強制収容者のひとり」としての raw な記述を遠まわしに避けているような節があります。筆者である大山氏はそこに、巧妙に隠されたものを感じてしまうようです。無理矢理小説に例えれば、「信用できない語り手」につながるような疑問かもしれません。しかしフランクル自身が作中で「トリック」と自らを評しているように、自覚的・意識的であると感じられる点もあり、一筋縄ではいかないのです。

『夜と霧』を読んで、読者みんなで話し合いをし、その上でまとめられた大山氏の文章を拝読すると、『にじみでている著者のありようと私のありようの間にひそむ大きな溝に、さらに居住まいを正して臨む必要があると感じました』という締めの一文にこちらも身の居住まいを正される思いがしたのです。

こういう深みのある本でしたので、読書会終了後のアフターも大変盛り上がりました。皆さんもぜひ、これを機会に本書とあらたに会い直して頂ければと思います。
(朝さろん・芹沢)

了